

「早水台遺跡とその文化」覚書

佐藤 暁

(一) はじめに

別府湾の北岸は瀬戸内海に大きく突出する国東半島の着根部となつてゐる。この着根部に速見郡日出町がある。日出町の東方、俗にトガリの鼻と呼ばれる小岬の上の海岸段丘に、早水台遺跡がある。

この遺跡は昭和二十四年頃、土地の所有者田ノ口秀臣氏が開墾中、多量に出土する土器片や石器に興味を持ち、その年代を知ろうとしたことから始まる。田ノ口氏は数点の土器を持つて各所に鑑定を依頼したが、明確な解答は得られなかつた。

昭和二十六年夏、たまたまこの遺跡の所在を知つた大分大学歴史学研究会は、富米隆教授（当時助教授）・半田康夫・安河内両助教授を中心に試掘を行ない、この遺跡がまれにみる縄文早期の所謂押型文土器の大遺跡であることを確認した。この発掘結果は、大分大学歴史学研究会誌「志与」に発表され三〇部ほどが全国の著名な考古学者に送付された。

ついで昭和二十八年七月と同年十一月の二期にわたり、大分県教育委員会主催の第一回早水台調査がおこなわれ、その発掘調査結果は県教育委員会から「早水台」報告書として昭和三十年に刊行された。本報告は学界での早期縄文式文化時代研究者の注目を引き、先縄文文化との関連から本遺跡の再検討が要求されるにいたつた。

昭和三十八年の末頃より、農業構造改善事業として蜜柑園造成を理由に土地所有者の現状変更許可申請書が提出された。これに先だつて昭和三十三年三月二十五日大分県は遺跡の重要性から大分県指定史跡として指定してゐた。この現状変更許可申

請によつて、昭和三十九年二月十日より同月二十一日までの間、資料保存のための緊急発掘調査がおこなわれ、その発掘成果は、昭和四十年に大分県文化財調査報告第十二集「続早水台」として県教育委員会より刊行された。その結果、早水台遺跡の大分県指定史跡の指定は昭和四十年三月に取消となり、その大半の面積はミカン園造成のブルドーザーによる開墾がおこなわれ、早水台遺跡の三分の二はこれによつて破壊されてしまった。

さて、私はここで長々と早水台遺跡の調査史を書こうとは思わない。

それよりもまず、これまでの早水台遺跡の諸調査の成果を整理し、再検討して、残された三分の一の早水台遺跡のなかから考古学研究者が、今後「何を学ばねばならぬか」を考えてみたいと思う。またこれまでの未解の諸問題について多少なりとも考察をおこない、今後の早水台遺跡研究に役立てたい念願である。その主旨から試論推理の域を出ない点多々あることとおもわれるが、この小論を純然たる学術論文として読まれるよりも、一種の考古学的・民族的・文化人類学的な読みものとして一読していただきたい。このことを会員諸氏にまずお願いして筆を進めたい。

さて早水台遺跡は昭和三十九年の発掘以後、「旧石器」の遺跡として概説書に登場し、注目をあびつつある。これは昭和二十七年の「丹生旧石器」につぐ先史学上の事件ともいえよう。そこで早水台遺跡の旧石器について、丹生旧石器発見以来の学界的動きをまじえつつ筆を進めてみたいと考えている。

(二) 旧石器研究の動きと早水台遺跡

昭和三十七年の春、慶応大学で開かれた日本考古学協会第二十八回総会の席上で発表された「丹生旧石器」^①は、石器時代の研究のみならず、日本考古学界の在り方という点にも一つの大きな波紋を投じた。このことは藤森栄一氏の近著「旧石器の狩人」^②などに詳述されているので、これを繰返す必要はあるまい。

この学界の動きに、発見に關係した地方研究者の我々グループは、ただ呆然とあきれざる以外に、なす術がなかつた。

昭和三十四年以來、発見から調査・資料整理と努力を重ねてきた「丹生旧石器」はひとたび新聞紙に報道されるや、いわゆる權威ある学者の手により、雑誌に、学会にと発見され、我々グループの手の届かぬ雲の上の存在？になるかの感があつた。

また「丹生旧石器」が「日本の考古学者の協同一致によつて解明」^③されん事を望んだ、我々グループの希望に反して、協会展席上の一騒動。我々を十分に納得させうる組織をもたぬ発掘調査団による調査。「丹生旧石器は、縄文早期の土器を伴なつている」「青森県金木砂礫層のような偽石器だ」などの出所不明の極秘情報が流れた。この「丹生旧石器」の発見は日本考古学界に新しい契機を生んだ。三十七年六月には新潟県佐渡佐和田町長木で、アフリカのカフ期のそれに似た竜骨形石器が^④発見された。しかしその黒白の判定はいまだに決められていない。こうして旧石器の問題が日本各地で飛火しようとしていた頃、大分県では藤内喜六・二宮昭二・高雅幸・大塚昭憲などの大分県社会民族学会のグループの手で、大分市永興・明野・大分町庄ノ原^⑤などの「丹生旧石器」の遺跡が新たに開拓された。また山口県・北九州地方では「丹生旧石器」発見について我々グループを指導された、山口医科大学の金関文夫教授・農林省水産大学の国分直一教授や下関史前研究会の伊原晃融・伊東昭雄の皆さんでの下関市の横野・福江・武久^⑥などの諸遺跡が開拓された。このことが契機になり山口県、北九州、東九州にわたる範圍の「丹生旧石器」の分布の調査がおこなわれ、昭和三十七年十月、奈良学芸大学での日本考古学協会での、金関・国分両教授と筆者の「西日本の前期旧石器遺跡」^⑦という発表になつた。

さらに国分教授は山口県豊浦町田島から「丹生旧石器」を発見した。田島遺跡の「丹生旧石器」は田島の台地を覆うクサリ礫層とその下部の基盤岩直上部から発見された。国分教授の二次にわたる調査と努力は、ついに礫器(chopper)を基盤岩上で発見した。筆者の実見したところでは基盤岩直上はひどく風化をうけ、チョーク状になつていたが、取り上げられた礫器は下半身に花崗岩基盤のチョーク状風化土が固着し、上半身はクサリ礫にまみれていた。この田島台地を被覆するクサリ礫層は山口大学の河野通弘(地質学)・小野忠熙(地形学)両教授の調査により、ミンデルIIリス間永期に当る時期の形成だとされた。また石器製作技法の上でもプロト・ルヴァロカ技法というべき技法が登場している。この田島遺跡の層位の把握の意義は大きいものであると考えられている。田島文化の位置づけが明らかになるによつて「丹生旧石器」とこれまで総括的に呼ばれていた同系列の文化が細分化され、その文化の性格が明らかになると考えられるからである。

またこれに先だつ昭和三十八年には大分市戸次の尾津留洞穴の調査発掘が、金関教授を団長にして二期にわたりおこなわれ、多量の旧石器を発見した。

このような前期旧石器の研究にもなつて、昭和二十八年の早水台遺跡の発掘で発見された二、三の礫器が、縄文以前の文化の所産ではないかとの疑問が持たれた。この先駆者はスイスの先史学者ヤリングガー神父である。この疑問を解決すべく、昭和三十九年の早水台遺跡調査は押型文土器包含層下の調査に特に力を入れられた。その結果、早水台遺跡の第五層及び第六層の下末吉相当層だとされる層上から、多量の旧石器の一群が発見された。また第四層からは群馬県岩宿遺跡の岩宿Ⅰ文化や、岡山県鷲羽山遺跡などと共通性をもつ縦長の剝片石器を主体とする石器文化が、第三層の下位からは長崎県吉井町福井の岩陰遺跡の第九層、香川県井島遺跡の井島Ⅰの文化に相当すると考えられる、瀬戸内技法による剝片石器が、第三層の上位から細石器が層位的に発見された。この第五、六層の旧石器については、極めて顕著に赤化作用をうけているので、加工技術等の判別には困難な点もあるが、ルヴァロア技法が用いられていることがうかがえる。芹沢長介氏は周口店猿人洞上層文化との対比によるもの^⑩を指摘している。しかし、それは二次的加工の痕跡の比較整齊されている周口店猿人洞上層文化との対比によるもの

であろう。しかし、周口店石器にはハンド・アックスや菱形石器が発見されていないところに注意を要しよう。早水台石器はくノンド・アックスや菱形石器が発場し、石器のヴァラエティが大きくなっており、また石器の器形は丹生や田島文化に比して一般に小形となつてゐる。こうした早水台遺跡の発掘を通じて、これまで「丹生旧石器」の否定にまわつた形の芹沢長介氏が「早水台旧石器」の調査者の一人であり、旧石器の研究者として強力に研究を進め始めたのも、これまでの学界の動きからみればかなり妙な成り行きといふものであらう。

下末吉相当層と見られる層は山陰の響灘沿岸地方にもある。下関地方の下末吉相当層と見られるクサリ礫層については、桜井健、加藤芳朗、高橋英大郎、河野通弘、小野忠照らの諸教授は下末吉説をとり、それに対して九大地質学教室の首藤次男博士はかつて博士自身が下末吉相当と見られていたものについて、近年一時期下げて武蔵野期に比定されてゐる立場をとられてゐる。また小野忠照教授の下関市綾羅木の礫核石器もこの層と考えられ、同教授により瀬戸内海側の美濃ヶ浜^⑩においてもこの層の文化が確認されてゐる。

また国分教授・伊藤晃融・伊東昭雄氏らにより下関市の横野・福江・武久からは、下末吉あるいは武蔵野相当層から石器を見出している。これらの遺跡では、硅質凝灰岩の石器が発場し、チョッパー・チョッピング・ツールに前期の様相を遺し、剥離技術の上でも、交互剥離・階段状剥離の技法をもつ点、楕円形ハンド・アックスの所在する点などの共通類似点を持ちながらも、ムステリアン系のD字型スクレパーが新に登場して中期的な様相を帯びてくることが知られてゐる。

熊本県甲佐町大峯のローム層から多数の石器が発見され、昭和四〇年八月、国分教授・三島格氏や熊本女子大学の乙益重隆教授等が調査し、石器の出土層が中位ロームであることが確認された。この中位ロームから発見された剥片石器はセレベスの下部のトーレン剥片石器に類似しており、なお上層の攪乱層からは早水台の第四層から発見された縦長の剥片石器に極めて類似する岩宿文化に相当の剥片石器が発見されている。この遺跡の石器には、輝緑凝灰岩・チャート・変質安山岩が用いられ、礫核石器にはチョッパー、チョッピング・ツールがあり、小形の尖頭器と菱形石器が発見されている。技法としては交互

剝離が普通に用いられているなど、「早水台石器」に相似するものが認められるが、剝離技法においては、縦長剝離が見出され、大峯文化期に続くものは、早水台の第四層で発見された岩宿Ⅰ文化を主体とした石刃文化であることが推察される。

この大峯遺跡の石器包含層のロームについては、第四紀研究グループの芝崎達雄氏（資源科学研究所）・古河博恭氏（熊本農政局）はヴェルム氷期相当の最寒期に当る時期のロームと^七とされている。また日本地質学会第四紀総合研究有明海研究グループの総合調査の成果、とくにカーボン・14テストの成果の上に立つてみると、その中位ロームは約二〇、〇〇〇年前後の時期に当るといわれている。大峯遺跡では縄文早期の土器が上層より採集されているが、遺跡が開墾で破壊されているので中位ローム文化との連続は不明であるが、早水台の場合第四層の縦長剥片石刃文化・第三層の瀬戸内技法剥片文化・上位の粗石器・第二層の縄文早期の押型文土器群と一連の連続性をもつて考察してゆけることは注目に値する。

このように西南日本、つまり本州島の西部である山口県・九州島の福岡・大分・熊本の各県で、旧石器の系統的研究が始まるとしてゐる。その一つの鍵点が早水台遺跡の旧石器にあることは読者も了解されたこととおもう。このような視点で、さらに早水台遺跡の旧石器の研究を一層深めていかねばならぬことはいうまでもない。

(三) 大遺跡とそれを取りまく小遺跡群

早水台遺跡の特長は南北三百m・東西二百mの楕円形状の台地全域にわたる広大な遺物包含層をもつ大遺跡であることである。早水台遺跡発見以前これほどの大遺跡は例がなかつたといつても過言ではなかつた。

香川県の小高島や井島大浦、岡山県の牛窓町の沖にある黄島と黒島、紀伊半島の田辺湾の高山寺など極めて小規模な遺跡である。稲荷台式土器を出した東京都世田ヶ谷区の船橋町稲荷台遺跡では、十mぐらゐの間隔で、約二mと四mぐらゐの範囲に褐色土層内に、土器片や石器がかなり密集して埋没していたが、その範囲外には、ほとんどなにも発見できなかったといふ。^①

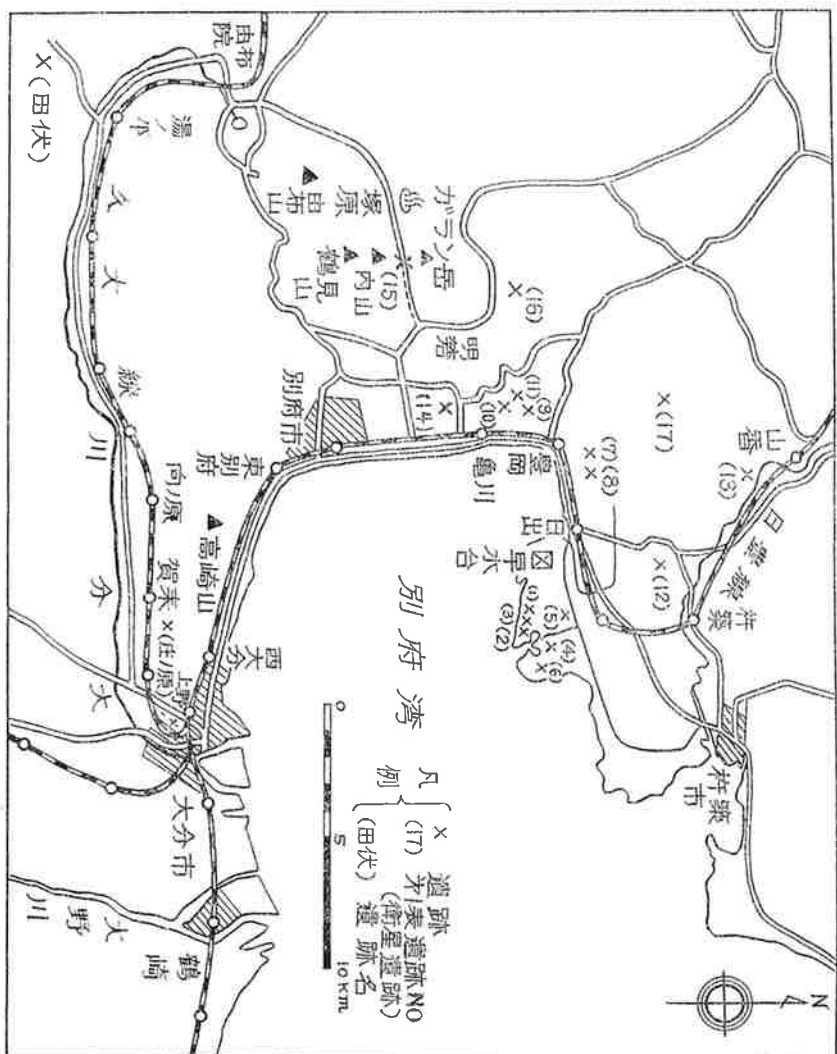
第1表 早水台遺跡の衛星遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡状況	出土品形式	備考
1	子招遺跡	速見郡日出町大字川崎東 小深江	包含地	先縄文・四原田 川原田・早水台	昭和31年発見 層位確認
2	日比ノ浦 遺跡	全郡全町大字大神日比ノ 浦	?	?	賀川光夫氏による 所在不明
3	深江遺跡	全郡全町大字大神深江	?	?	全上
4	瀬ノ上 遺跡	全郡全町大字大神瀬ノ上	?	?	全上
5	田向遺跡	全郡全町大字大神三尺山 田向	散布地	早水台Ⅰ・Ⅱ	佐藤曉調査
6	燈籠番 遺跡	全郡全町大字大神字牧ノ 内	包含地	早水台Ⅰ・Ⅱ	全上
7	椎園遺跡	全郡全町大字豊岡字辻間	包含地	川原田Ⅱ 早水台Ⅰ・Ⅱ	包含層確認す
8	上ノ原 遺跡	全郡全町大字豊岡字辻間 上ノ原	全上	早水台Ⅰ・Ⅱ	全上
9	小A 遺跡	全郡全町大字壘岡字萱場 小畑原	全上	川原田Ⅰ 住居跡	全上
10	小B 遺跡	全郡全町大字壘岡小畑原	散布地	早水台Ⅱ	表面採集 開墾により発見
11	小C 遺跡	全上	全上	早水台Ⅱ (ヤトコロ式)	全上
12	大津遺跡	全郡全町大字藤原大津荒 平	弥生式遺跡 散布地	早水台Ⅱ?	入江英親氏調査
13	川原田洞 穴遺跡	全郡山香町大字広瀬川原 田	岩陰遺跡	川原田Ⅰ・Ⅱ 早水台Ⅰ・Ⅱ	賀川光夫氏調査
14	尾崎園 遺跡	別府市野田尾崎園岡平	散布地	早水台Ⅱ	藤内喜六氏調査
15	兔落し 跡	別府市伽藍岳兔落し峠	包含地	早水Ⅱ?	佐藤曉採集
16	猫石原 遺跡	速見郡日出町大字南畑猫 石原	散布地	早水台Ⅱ	全上
17	柏川遺跡	全郡全町大字南端柏川	散布地	早水台Ⅰ・Ⅱ	全上

第2表 領域の広さ

採集狩猟民族名	バンドの大きさ (人口)	領域の広さ (km)	備考
アンダマン島 ミンコピ	40~50人	40 km	バンドによる共同体。 雨季に半定着をする。
マライ半島 セマング	20~30人	50 km	全上
西オーストラリア カリエラ族	約 30人	海岸部 260km 内陸部 390~520km	全上
アメリカ大盆地 北ハイウテ族	約 100人	130~300km	全上 冬村をつくる
早水台縄文人	?	約 200km	遺跡分布による推定 先史時代

第1図 早水台を中心とする縄文早期遺跡分布



このように縄文早期の遺跡は、住居が多くて数戸、あるいは二、三戸だったと考えられる遺跡が多い。これらの遺跡に比して早水台遺跡はその規模から当時としては桁はずれの戸数を持つ大遺跡であるかが理解されよう。

いつぼう早水台遺跡の調査の進展とともに、早水台遺跡を中心に五〇^m以下か、程度の小規模な押型文土器の遺跡が発見されはじめた。この小遺跡群を地図の上で詳細に検討すると、あたかも大都市をとりまく衛星都市のように、早水台を中心に多少の例外はあるが、ほぼ四区^mの間隔で分布している。この小遺跡群を、土器の形式的移行の面から考察される遺跡の同時性の問題もあろうが、この問題をさておいて、私は早水台遺跡の「衛星遺跡」と呼ぶことにした。(第一表及び第一図参照)

この衛星遺跡の相互の間隔を基準に更に新しい押型遺跡を踏査してみると、さらに新しい遺跡が発見追加された。別府湾の北岸に聳ゆる鹿鳴越山塊の北向のスロープの日出町柏川遺跡、鶴見火山塊の東山麓の自衛隊演習地の十文字原の北部の日出町南端の猫石原遺跡、さらに昭和三十五年には別府市の藤内喜六氏により別府市野田の尾崎園遺跡が発見追加された。

また別府市明礬から別府の古い山の湯治場塚原へ抜ける「兎落し」という古道がある。昭和三十六年夏のおわり、私はこの道を明礬から塚原へ抜けたことがある。明礬からバスをすて、扇山と鍋山の谿谷を通り、さらに胸を突くような密林の小径をたどつて、内山と伽藍嶽の鞍部に登り着くと、眼下には蒼い波静かな別府湾の美しい風景が夏の日ざしのもとに開け、涼い風が吹き上げてくる。この美しい景観に見とれながら、谿谷から吹き上げてくる涼風に汗をぬぐいつつ休憩した私は、ふと腰を下した岩の基部に目を落した。「おヤツ」、私の目をひいたのは黒土層の中からわずかに頭を出した、小さな土器片である。期待に胸をふるえさせながらもナイフで掘り出してみると、二片の土器片であった。いづれも胸部のあたり何の特長もなさそうだ。念のため水筒の水で洗つてみると、その土器の表面には回転押捺による山形連続文が施されている。私は呆然としてしまった。かつては火山の噴火口であつたらう塚原温泉の爆裂口上の鞍部、こんなところに縄文早期の遺跡があるうとは、夢にも考えられなかつたことである。私はできるだけこの土器の出土地附近をあさつてまわつたが、この二片の土器以外発見できなかつた。この日の捜査であきらめきれなかつた私は、その夜塚原に泊り、翌日ふたたびさがしてはみたが二片の土器以外

には発見できずにしまった。

その後、ふと学生時代に読んだ、藤森栄一氏の著書「かもしかみち」に、押型文土器の分布についての論考があることを思い出した。そして藤森氏独特の美文で綴られた、「かもしかみち」を読みかえしてみた。藤森氏は「飛騨から信濃へ抜ける日本アルプスの峻峰乗鞍岳コルを越える嶮路「木曾殿乗越」海拔二千米の峠頂の近くにも：略：更に日本島の屋根信濃では木曾川溪谷の処々、天竜上流の河成段丘の処々、スキーで名ある菅平・霧ヶ峰・蓼科山等の高原・諏訪湖盆地ではそこから方々へ越えて行く勝弦・後山・金沢・枝突等にもそうした遺跡が少なくない」^②ことを教えてくれた。また一方では私の地図の上で葦衛屋遺跡の分布は、大分郡湯布院町の湯平の田伏遺跡や、大分郡大分町賀来の庄ノ原遺跡や大分市上野遺跡に近かつこうとしているかにみえた。

さて、ここで再び早水台遺跡にかえろう。早水台遺跡のこれまでの調査でもつとも成果をあげたものは、遺物の研究である。

四 早水台文化の土器について

早水台遺跡の昭和二十八年、三十九年の前後二回の調査により、縄文式早期の土器については明確な分類がおこなわれている。別府大学教授の賀川光夫氏によれば、^①早水台式土器は燃系文土器のA類と押型文土器であるB類、無文のC類との三種に分類されるという。このうちB類を楕円押捺文の種類を層位的に細別し、尖底薄手土器を早水台I式・楕円(大形文)押型厚手尖底土器を早水台II式にし、編年もこの順とした。さらに速見郡山香町川原田洞窟遺跡において、IV(b)層から小型山型文ベルト状施文尖底土器川原田II式が発見され早水台I式に先行することが明確となった。またその下層にあたるIV(c)層からは、押型文土器の先行形式として、著しい尖底の薄手無文土器が発見され、それを川原田I式とした。さらに、三十九年の早水台

遺跡調査では、従来、押型文土器包含層とされていた黒色土層の下層にあたる褐色土層上部にまで土器の包含が認められ、この層出土の口縁部狭小尖底深鉢型土器を早水台Ⅰ式の古式形式と考へ、川原田Ⅱ式の次に置いた。

さらに、早水台Ⅱ式の後に鹿兒島県出水貝塚下層や大分県竹田市ヤトコロ遺跡の平底の文様粗大の押型文土器を置き、早期縄文式土器の推移を、川原田Ⅰ―川原田Ⅱ―早水台Ⅰ―早水台Ⅱ―ヤトコロ式という系統を立て、またA類である撚糸文土器を川原田Ⅱ式及び早水台Ⅱ式の間に伴するとし、さらにC類無文土器の盛行を早水台Ⅱ式の時期とした。この編年に対して多少の疑点はないが、これまでの編年をなしたとげた賀川氏の努力は大きいものがある。

さて昭和二十九年の末から四〇年の夏までの早水台の蜜柑園造成のためのブルドーザーによる開墾は、これまでうかがい得なかつた早水台遺跡の一面を表わした。その一つは、これまで早水台遺跡で知られてなかつた川原田Ⅰ式・川原田Ⅱ式・及びヤトコロ式土器の包含層が発見されたことである。これはいままでも遺物がないとされていた早水台丘陵の西麓と南麓の小径に接する畑地である。ここでは黒土層が極めて厚く八十cm前後を示し、下層の褐色土層は約五十cmの厚さである。その褐色土層の上位二〇cmほどの深さまで約八mほどの間隔で五か所の土器の集積があり、そのうち二箇所は川原田Ⅰ、三か所は川原田Ⅱ式が包含されていたが、これらの集積の間には層位的な関係を見出すことができなかつたが、川原田Ⅰ式の方が褐色土層表面下二〇cmを中心に、川原田Ⅱ式は褐色土層表面が一〇cmから表面までを中心に包含されていることがわかつた。また黒土層中にはヤトコロ式に層する平底の土器片の集積三か所があり、黒土層下位つまり褐色表面より一五cmほどの無包含の層をはさんで黒色土層表面より四〇cmの深さまで、厚さ二・五cmほどのレンズ状の層をなして包含されていた。⁽³⁾

このように、その後開墾によつての早水台遺跡では縄文早期前葉から後葉までの土器が一応そろつたことになる。この他に前縄文文化の石器や所謂前期旧石器の発見があつたが、これは前章で大略を記したのでこの章ではとりあげないこととした。

(五) 早水台文化の住居跡

早水台遺跡が縄文早期の時期の長い年月にわたる遺跡であることが、ほぼ明確となつたいま、誰もが第一に疑問に思うことは、早水台文化人がどのような住居に住んでいたかということであろう。

ブルドーザー開墾に立会う以前に、私はブルドーザーによる黒土の剥ぎとりにより、多数の柱穴が早水台の赤土(褐色土層つまり第三層以下の土層)上に姿を表わすものとして期待していた。さて開墾に立ち合つて見て、その期待は見事に裏切られた。蜜柑園造成のブルドーザー開墾とは長さ一〇mほどの地域をブルドーザーの中だけ順次に表土、赤土層と掘り返していくブルドーザーによる天地返し開墾であつたからである。そのため私は遺物の採集・層位の実測・位置の記入・写真さえ満足にできぬほどブルドーザーに追いまくられて、柱穴の分布など調査することはとうてい出来ない始末であつた。

そこでこれまで調査をふりかえつてみよう。早水台遺跡の調査で住居跡を明確に調査した調査は、昭和二十八年の調査であろう。この調査の報告^①によると、五十五個の柱穴が発見されている。そのうち東斜面にもうけられたA調査区では、約10度の傾斜地に五個の柱穴がほぼ3mの間隔で弧状に並び、その西端に一mほどの間隔でさらに一個の柱穴が、東端には五〇cmほどの間隔で一個の柱穴が穿たれてあり、あわせて七個の柱穴が発見された。またB調査区では炉趾を中心に、わずかな凹みをもつた堅穴状構造が発見され、土堤が炉趾の南部1mのところが発見され、土堤にそつて一個の柱穴が発見され、また炉趾の北西2mの地点に一個の柱穴が発見された。

またC調査区では二・五〇m×二・三〇mの方形プランの住居跡らしい七個の柱穴と三・八〇m×二・九〇mの長方形プランの住居跡らしい八個の柱穴が重複して発見されている。しかし、これ以外に、この二個の住居跡の柱列に入らない柱列が九個ほど発見され、この九個の住居跡はどのように考えたらいいかの疑問が残されている。またC-N調査区では、一九個の柱穴が、ほぼ六角形のプランでもつて発見され、その柱穴から龜甲形折角作り(凹妻)の住居であつたと推定されている。

さて縄文早期の住居跡が発見された遺跡としては、速見郡日出町豊岡の小畑原A遺跡²⁰がある。この小畑原遺跡は、十文字原高原が東にのび、その東端が舌状山麓台地となつて、日出町豊岡小浦の谷にせまる位置の丘陵上にある。この附近一帯は芝と笹の生えた一面の高原で、中央に谷を狭んで南北二つの舌状台地が東に向かつて突出している。その西部台地には戦後中谷長次郎氏が入植開墾を行ない中谷豊岡が開かれ、北部台地は豊岡地区平道部落の採草地として原野のままである。

この小畑原を日出町豊岡新町から玖珠森へ抜ける旧藩時代の大名道路が北部台地の中央を縦断し、さらに谷を迂回して南部台地の着根部を横断し、別府市小畑の部落を抜けて十文字原へと登つている。この北部丘陵の大名道路にそつて川原田I式に極めて類似する鋭角に近い角度を持つ無文尖底土器の包含層が露出してゐる。これが小畑原A遺跡である。さらに南部丘陵着根部のほぼ中央、道路に沿つて中谷氏の居宅があるが、この敷地から鹿兒島出水貝塚下層の押型文土器と極めて類似する押型文土器片が発見されている（小畑原B遺跡）。さらに南部台地の東端に近い中谷氏のリング園のなから大型楕円押型文の粗大深鉢型土器の破片が発見され、この土器片は裏面に一種独特な条痕様の調整文を持つてゐる。この遺跡が小畑原の遺跡である。さらにこの台地着根部の西方に縄文後期の鐘ヶ崎式土器の出土する小畑原D遺跡、及び中谷氏の住宅の西部に弥生式後期の散布地のE遺跡がある。この小畑原台地の三地点の早期縄文遺跡はそれぞれ遺物包含層が単一層であるところから、住居跡の調査に適していると考えられる。

昭和三十五年日出町教育委員会は遺跡台帳作成²¹のために包含層確認の小規模な予備調査を行なつた。この予備調査で東西にはしる六個の径十〜五cmほどの小柱穴が一行に三〇cmの間隔をおいて二米ほどの長さに並び、そのほぼ中央の南部一、二〇mのところ到一个の柱穴が発見された。この他にこの附近に柱穴らしいものは見当らず、この七個の柱穴が一つの住居であること物語つていた。このような小畑原A遺跡の柱穴は、発見当時は吾々には不可解なものであつた。これまでの考古学的な発見例では寡聞にしてこのような例は知らなかつた。この小畑原A遺跡の柱穴群を解決するには、縄文文化自体を自分でたしかねばならなかつた。縄文文化は、狩猟・漁撈をとめない食物採集経済の文化であるといわれており、今日でも考古学界的定説で

ある。しかし、これに対して金閨文夫博士や園分教授は民族学・文化人類学の立場から独特の見解を持つて居られ、数々のすぐれた論文を發表して居られる。そうだ、もつと広い視野で早水台を見なおすべきだ。

(六) 住居址についての民族学上の事例と考察

この縄文文化人のような採集・狩猟をもつばらの生業とする諸民族が、現在でもわずかながらもなお世界の若干地域に余喘を保つてゐる。私は民族学・文化人類学の文献をあさつた。赤道アフリカのピグミー、南アフリカのカラハリ砂漠のブッシュマン、セイロン島のウエダ、東南アジアのネグリト諸族。(アングマン島のミンコピ、マライ半島のセマング、フィリピンのアエタなど)、オーストラリアのアボリジン、一八七六年に絶滅したタスマニア島人、極北エスキモー、北アメリカ(アラスカ・カナダ・プレーリー・大盆地など)のインディアン諸族、南アメリカのフエブ島民の採集・狩猟民が私のノートにあげられていつた。かれらの生活を維持する生産用具は、近代文明人との接触によつてえられた。若干の金属器をのぞけば、石器・骨角器が依然として用いられ、これらを材料とする槍・鋸・弓矢・ブーメラン(Bumerang)・棍棒などわずかな狩猟具と、打製もしくは磨製の石刃、石斧などの利器、さらに根茎植物の採集に用いる粗末な擗棒くらいなものであつた。そのうち赤道アフリカのピグミーや、東南アジアのネグリトでは石器さえあまり発達せず、木器が中心になつており、エスキモーでも骨角器が主として使いられている。またタスマニアでは弓矢が知られず、オーストラリアのアボリジンも棍棒とブーメランが代表的である。私はこの採集狩猟民を生産用具の上から、彼らの道具が土に埋もれ、やがて木質部などの腐蝕しやすい部は消失し、石器などの腐蝕にくい器具が残つたとして、考古学の上からどういふ判断を下すか考へてみた。

たとえば、アボリジンは土器を知らない。その意味では旧石器文化の段階にあるわけである。また彼らの生産用具である棍棒やブーメランが木製品であるため土中で消失したら、彼等が使用する槍の穂先である縦長割片の石刃をもつて我々は後期旧石器人と考へるだらう。南アフリカのブッシュマンも土器を知らない。しかしかれらは弓矢をもつてゐる。木質の弓と矢は消

失しても石鏃などの鏃が残存するはずであるから、それをもつて我々は中石器時代人あるいはまた、それが日本であれば先縄文文化人ぐらゐに考えるかも知れない。

新石器時代の特長は、磨製石器と土器の利用、織物をつくる点と、農業・牧畜を行なうことであるとヨーロッパの考古学でいわれている。しかしどうしたことか日本では農業・牧畜の項がはずされている。しかし採集・狩猟のなかでも北アメリカ大盆地のパイウチ族やカルフォルニアのヨークト族、南アフリカのブッシュマンの一部は土器を作っている。このことから新石器時代のそれらの要素のすべてがある文化のなかに同時に現われてくるとはかぎらない。時間的にも、文化的にも前時代の要素が残存する過渡期があることがわかった。このことは早水台文化を理解する一つの鍵点ではなからうか。このような観点で早水台文化に近い将来、再検討してみたいと考えている。

さて、文化人類学・民族学の文献を読みあさりながら、私は小畑原A遺跡の柱穴の鍵点となる住居をあさつた。その結果、南アフリカのブッシュマンや、東南アジアのネグリート、オーストラリアのアボリジン、タスマニア島人の間に分布する「風よけ」住居が、小畑原A遺跡の柱穴の構造と極めて類似していることを知つた。

シャードンベアヒはフィリピンのネグリトの「風よけ」についてつぎのように述べている。「住むのに適当な場所が見つかる、まずしなければならぬのは「風よけ」を立てることだ、この仕事を果すのは普通女と子供だが、ここでは風よけは次の順序でつくられる。まず竹を割つて長さ二m、巾一mの枠をつくる。次に枠に棒を一五cmの間隔で縦横にしぼりつける。さらにこの棒と棒のすきまを木の葉で屋根瓦のようにおおう。上部の中央に長さ二mのつつかい棒をとりつけ、こうして四五度の角度でななめにたてられる。なお風よけの下の地面は木の葉でおおつて快適にする」^②。この文章を読んだ時の私は驚きのあまり呆然とした。あまりにも小畑原A遺跡の柱穴の構造と似ている、いや同じ構造であるといつて差支えないのではないか。私はいま一度丹念にこの文章を読みかえして見た。ただ残念なことには「風よけ」の屋根の部分の地面と接するあたりの構造が明瞭に記されていない。私は考えてみた。風よけの屋根は四五度の角度で地面に立てられている。支えるのは中央の一本の柱

だ。これでは後方からの風は防げるかも知れないが、前方からの風では防ぎようもない。小畑原のような山麓台地の谷にのぞんだ所では、海よりの風が日中吹き上げるのは当然だ。そうすれば屋根の基部は強く固定しなければ風によつて飛ばされてしまう。そこで風よけの基部を固定するには、杭を打ち込み、これに風よけの骨組みの丸太を結びつけて固定するか、風よけの屋根の骨組みの丸太の末端を延し、これを土中に差込むか、または埋没させて固定する。あるいはまた風よけの基部接地の部に土を覆つて埋めて固定するしかない。このような方法で風よけの屋根を固定するとすれば、第一の杭を用いた固定方法は小畑原A遺跡の柱穴で応用されたと考えても差支えがないのではないか。このような観点からみると、早水台遺跡のB調査区の竪穴構造の山に見られる土堀もこの風よけの基部の固定のための構造と考えても考えられないこともない。

さらにまた、シュレットが指摘しているように現在未開民族の風よけのなかには、方形住居や円形住居への移行形態をしめすものがあるという。南アフリカのブッシュマンやベルグダマ族では、単に藪を密にしただけの風よけ！支柱の先をたばねた半円形の風よけ（円形小屋）という形式的発展が見られるという。またマレー半島のセマング族のあいだでは半円形の風よけとともに方形の風よけがみられる。つまり二個の風よけが普通は二〜三mほどはなれて向き合つてたてられるのだが、この二つが非常に接近してあつた場合、上端がふれ合うほどになり、ここでできた棟は特に厚くしてあるという。他の場合では風よけが連続して並んでおり、風よけの列にそつてたき火が並んでいるという。^③

このような民族学的な事例からみて小畑原A遺跡の柱穴は風よけと考へても差支えないようだ。また早水台においての住居跡も、大体において風よけから一步進んだマレー半島のセマングの方形の風よけ程度のものか、あるいはその切妻の一部分に側壁をとりつけた程度のもつと見てよいのではなからうか。^④カナダのアサバスカン・インデアンは、厳寒にもかかわらず風よけとたき火で我慢することもあるというから、未開人や原始人では日本の冬期の温度はそれほど凌ぎにくいものではなかつたと考えられる。

(七) 採集・狩猟民の共同体と衛星遺跡の意義

採集・狩猟の生活はまた漂泊の生活でもあつた。

藤森栄一氏はこの漂泊の道について述べている。「江藤千万樹・長田実氏、近くは小野真一氏と追つてきた口伊豆の早期縄文遺跡の分布は、それ自体立派な原始集落構成の一類型といつていいだろう。ほぼ同じ比高の台地に錯のひたいの様な小さな遺跡が点在する。ろくすっぽ堅穴もわからない。しかし、いろんな形式の土器や石器が、吹きだまりのように折り重なつて埋つている。明らかにそれは渠であり、彼らの道、等高線移動路(トラバース)の泊りである。そして、それはひっくりくるめて次から次と流れてくる可搬性の強い尖底土器の、運搬者(ポツタリーキャリア)たちの集落の特殊形態であるともいえる。こうした例は各地にあげられている。長野県諏訪湖盆地の千メートルの草叢高原地帯でもまつたくおなじである」、また「それは恰も彼等の漂泊の道でもある」^①。

さて、まえに現代の採集・狩猟民の生産要具が中石器から新石器初頭に比定さるべきものであることはふれたが、早水台遺跡から発見される生産要具としての石器も、尖頭礮器・局部磨石礮斧・打製石斧、スクレパー・石刃状の剝片、及び槍・矢の先につけたとおもわれる小形尖頭器と石鏃があげられる。このような貧弱な生産要具をもつて略奪経済を営む結果は、いきおいその生活を支えるためには広大な土地空間が必要となる。現代未開人である採集狩猟民の一〇〇人当りの人口密度をとると、アポリジンや北アメリカ大盆地のパイウテ族では一人、タスマニア人では三・八人という驚くべき低さである。^②ところで、かれら採集・狩猟民の生活資料はあらゆる季節を通じ、手やすくつねにえらるとはかぎらない。季節のうつりかわりはそのまま動植物界にはともなわぬ、あるいは増減、あるいは集中分散のリズムとなつてあらわれる。そして、それに応じて採集・狩猟民の生活もまた一年を周期とするリズムに規約されることとなる。

さて採集・狩猟民の生活は、当然のことながら定着生活に対して否定的である。かれらは食物をもとめ、つねに漂泊の旅を続けなければならない。しかし、その旅は必ずしも獲物は保証されてはいない。そこで、この保証されぬ獲物を求めて無限のあてのない流浪を続けるよりはむしろ一定地域内の動植物の運動法則を熟知し、自然のリズムを見きわめ、これに順応する方法のほうが確実である。このようなことからかれらとて決してあてのない無規律な漂泊者なわけではない。かれらの社会は一般に数家族から構成される群共同体を重要な社会的・経済的単位集団とするが、これは同時に地域集団をなしており、他の群共同体から区別された特定の領域を占有している。そして採集・狩猟のための流浪は原則としてこの領域内に限られている。この群共同体はバンドまたはホルドとよばれている。

このような領域制を基礎としてバンドの流浪がなされるが、そのさいに領域の広さとバンドの大きさの間には関数関係がなりたつと考えられている。それはもちろん環境条件、および利用する生産技術の相違を考慮しなければならない。しかしそれもおのづから限界がある。いかに恵みゆたかな環境といえ略奪経済としての生産性の限界がある以上、バンドの成員をいたずらに増大することは、それだけ流浪の範囲と頻度を増し、生活の不安定さをより多く拓く結果になるからである。ところで、このようなバンドの成員は、つねに統一ある集団として、その領域内に行動をともしているとは限らない。環境の季節的な変化に応じ、あるときはおおむね家族単位の小集団に分れて流浪し、またあるときは全員が集合してバンドの統一性をたかめる。南アフリカのブッシュマンは二〇〜一〇〇人よりなるバンドを作るが、かれらは動植物の豊富な夏の雨季には、おおむね家族ごとに分散し、領域内の獲物を求めて漂泊するが、ひとたび冬の乾季が訪れ、ほとんどの河川が涸れ、植物が枯死すると人々はわずかに残された不滅の泉の周辺に集り、この泉の周辺に集合してくる。それは単に飲用水のためばかりでなく、この季節には、かれらの獲物たちも、この泉の附近に集まってくるからにはかならない。北アメリカ大盆地のパイウテ族の場合にも、一〇〇人前後よりなるバンド成員が、冬季の三ヶ月を一ヶ所に集合し、半定着的な「冬の村」を構成する。これはきびしい寒さが流浪を困難にすることと、この間を過すに十分な食糧である松の種が秋の間にあらかじめ貯蔵されるからで

ある。

アメリカ五大湖周辺のオジブウェ族やメノミ族では、冬季の食糧として「野生米（ワールド・ライス）」が採集されていた。このワールド・ライスは、マコモ科の植物であつて、ちょうど稲のように沼池にこのんで自生している。秋になると豊かな穂をたれるのを、人々は小舟の上からつみとり「冬の村」の食糧としていた。また翌年の収量がふえるように、実粒をボール状のどろに包んで、水中のあちこちに投げ入れることもあり、採集地もしばしば家族別に保存されたという。本誌の二六号に富米隆教授は日本先史時代の水稲栽培以前にマコモの利用について論考されているが、このような農業の一步手前の状態は縄文文化期のかなり早い時期から考えられてもよいのではないかと、可能性を暗示しているようである。

さて、このような民族学的事例が示す、領域内で採集・狩猟民の放浪は、じつは必ずしも絶えまない放浪の連続でなく、セマングなどでは一ヶ所にほとんど五日程度の滞在をおこなうといふ。またブツシユマンでは二週間ぐらいの滞在期間があるといふ。このことから早水台遺跡をとりまく「衛星遺跡」の一つ一つが一アールにみたない遺跡であることから、縄文早期文化人たちがこの程度の滞在であつたことがうなづけそうな気がしないでもない。

さて、このような現代採集・狩猟民はさきに述べたように一定の領域内の放浪を行なつていた。これにたいして、いま早水台を中心とする衛星遺跡群について考えてみよう。衛星遺跡の西端の内山と伽藍岳の鞍部の兎落し遺跡から、東端の日出町大神の灯籠番遺跡まで直線距離で一六 km 。南端の早水台遺跡から北端の川原洞冨穴遺跡まで八 km 、ちなみに、この遺跡群のそれぞれの遺跡が狩猟地の中心にあると考へて、遺跡の相互の間隔が約四 km であるところから、東西の領域の径は二〇 km 、南北一二 km 、つまり、二四〇 km^2 という範囲を推定することができる。この二四〇 km^2 という数値の広さを領域と想定すると、それは第一二表にかかげた西オーストラリヤのカリエラ族の領域に近い広さをもつことになる。しかし、残念なことに、早水台遺跡の調査では、古代集落研究の立場からの調査、特に住居址の調査の不完全さ、またそれぞれの住居址の遺物による同時性の問題の解決にまでいたつていない。このようなことから、早水台遺跡の、住民の人口の推定、ひいては共同体の大きさを推定することがで

きない状態にある。しかし、早水台遺跡をとりまく衛屋遺跡の分布から領域制を考えることにより、おぼろげながら共同体の輪郭を推察することができよう。

これからもこの衛屋遺跡の発見は量を増すだろうし、領域も更に拡大されるかも知れない。しかし衛屋遺跡の間隔の四kmという規矩は距離がちじまる可能性はあつても、決して四km以上の一〇kmになつたり、一五kmいや八kmにもならないだろう。この点で明確に他の共同体（バンド）との識別ができよう。また早水台遺跡ほどの大きさともではないかまでも、他の地方でもこれから中心（冬村）になる可能性のある遺跡の抽出、それを中心とする遺跡の分布、遺跡の同時性の問題など新たに取組まねばならない問題となるであろう。

(六) 貝塚のない縄文式遺跡群

早水台遺跡の一つの謎は誰もが感ずることではあるが、遺跡が海岸に接する丘陵上にありながら貝塚を形成してないことである。この貝塚の形成をみないということは、早水台をとりまく衛屋遺跡でも同様なことがいえる。

山香町川原田洞穴遺跡においても、貝層を形成したのは、第一層の縄文後期の出水式系文化の時期、第二層の縄文中期の全縄文と爪形文土器文化の時期と第四層の縄文前期の塞ノ神式系文化の間期であつて、第五・八・九・一〇層の縄文早期の間期には貝層は形成されていない^①。この点について賀川光夫氏は「この遺跡を遺した人々が早水台上に生活して居つた時代には、台地は全体に隆起しつゝあり、別府湾には海進が行なわれず、現在と非常に異つた景観を呈していたかのように考えられる。

……（中略）……また同時期に属すると考えられる瀬戸内海各島の貝塚の貝類が淡水産に近いものである点から、それぞれの地域における自然景観がある程度現在と相異したことが考えられる。更に別府湾沿岸に点在する縄文早期の遺跡がいづれも貝塚を伴わないことや、凝灰岩の風化した変質層に樹木の繁茂した形跡が認められる点から景観のみならず気候も現在と異なつたことが考慮される^②」と考察されている。

しかし、最近になつて、山口大学の小野忠熙・河野通弘両教授によつて、山口県の下関市より光市におよぶ第四紀の海岸段丘の発達史が明らかにされ、周防灘沿岸の宇部市沖から中津市沖をへて函東半島にいたる間の低位段丘、つまり立川面相当段丘は海面下に沈没して海底段丘になつてゐることが明らかとなつた。この研究の一環として別府湾北岸においても、低位段丘の海面下沈没が見られ、日出沖には漁夫たちが通称「オトシ」とよんでいる海底の河の跡^①立川面に刻まれた^②が発見されてゐる。また洪積期末から沖積期初頭において、極めて狭い範囲で沈降・隆起の運動がおこなわれたらしく、別府湾沿岸で、北岸の日出地方と南岸の丹生台地一帯での下末吉面では約二〇〜五〇mの差があり、南岸は隆起し、北岸が沈下したらしいと考えられてきつがある。このようなことから、瀬戸内海の中央の黄島・黒島・小蔦島などの遺跡の貝層の貝類が淡水産であり、この地方の海進が縄文早期ころに比定されても、それが直ちに別府湾の海進と結びつかない現状にある。衛星遺跡を等高線上から検討をくわえてみると、どの遺跡も二五m以上の標高をもつており、早水台遺跡の最底の包含層の標高二四、八mであるところから、当時の海岸の汀線を推察すると、別府湾北岸の汀線は当時は、今日よりも一〇〜一五mほど上位にあつたことも考えられる。

また、貝塚とは、古代人が捕食した貝殻を遺棄したものが推積して層をなしている遺跡であつて、貝塚をのこすほど大量に貝を捕食する生活は、アフリカでは中石器時代のセビル期に発生したらしく、淡水産の貝殻や蝸牛の殻などが石器や石くず・骨片を含んだ、うず高い塵塚、つまり貝塚をなしている^③。またヨーロッパでも中石器時代からはじまる^④という。日本においては縄文式時代以前の貝塚の発見はまだないようである。縄文早期から貝塚の形成がみられるという。このような点から考えて、早水台遺跡が海岸に接して存在しながらも、貝塚をもたない原因は、早水台文化人は、貝塚として残されるほど貝類の大量捕食をおこなわなかつたのではなからうか。つまり、この文化の時期は、前時代の狩猟という要素が残存する過渡的な時期として考えられないこともない。なぜなら新石器時代の要素が、すべて同時に新石器の初頭に現われてくるとは考えられないのである。このことは川原田洞穴での縄文前期より以前（古式）の文化期には貝層が形成されず、縄文前期になつて急激に貝

層が形成された考古学的事実が、その事実を示していると思われる。この問題も地形学・地質学の研究が進歩していくと共に、遺跡の増加に伴なつてさらに明白化されてくると考えられる。

九 小 結

これまで述べてきたことは、早水台遺跡のこれまでの調査によつて、諸々の問題が解決されると共に、また大分県の地方史としてのみならず、日本的にも諸々の問題が生れてきたことである。それは早水台遺跡が単に早期縄文式文化の遺跡のみならず、先土器文化の遺跡であるという考古学的な興味の上の問題だけではなく、文化人類学・民族学の上からも興味ある諸問題がクローズ・アップされてきている。これまで東九州の先史学には遺跡発掘と遺物の編年を目的とする研究が主流をなしており、この分野、すなはち古代社会学や文化人類学・民族学の上から考古学的遺物・遺跡を観察研究する動きはあまりにも例が少なかつた。これからの先史学の上でこの分野の開拓が必要となつてくると思われるが、そのためには考古学・地質学・民俗学・文化人類学の上からの種々な未解決の問題の究明と資料の開拓、民族学的事例との対比研究というはてしない研究と努力が必要であらう。

ヨーロッパでの前期旧石器時代の研究が、一七九七年ジョン・フレアーがサフォックのホクスンで旧象の化石と共に、今日のアシニール期の旧石器を発見してから、約一六〇年の年月を経て、その間數十回論争や修正がくりかえされ、しかも考古学者の努力だけでなく、河成堆積物の研究、これらの地理・地質的現象と因果関係をもつ氷河の研究、洪積世哺乳動物、植物化石の研究による動物相や植物相の究明、物理学や化学によるカーボン・テイテングによる年代決定や熱残留磁気による年代決定法^①など、自然科学を総動員して数えきれぬ調査研究が積みかさねられ徐々に体系づけられてはいるが、それでもなお多くの未解決な問題を抱えているという^②。また、過去約半世紀にわたるポリネシア・ミクロネシアの研究も数多くのアメリカ・ドイツ・オーストラリアなど数多くの国の考古学・民族学・言語学・人類学・動植物学などの諸科学の研究がありなが

らも、「研究はいま始まつたばかりで資料蒐集の段階である」と語らせるほど未解決な問題が山積しているという。

この小論は、これからこの分野の大分県の先史時代研究が、一年ないし数年の期間の研究で、これらの諸問題を解決すべきものでないし、また解決さるべき性格でないことを充分に承知の上で、一步を踏み出すべく、そのような風潮の生れて来ることを夢想しながらも希望をまじえてのメモであり、将来この分野の広い視野に立つ研究者の出ることを期待しつつ、諸賢学・先輩の御教示をおおぎ研究を続けていくつもりである。

(二) の引用及び参考文献

- ① 金関丈夫・山内清男・佐藤達夫「大分県丹生遺跡の旧石器」および角田文衛「大分県丹生台地発見の石器類」昭和三十七年「日本考古学協会第二十八回総会研究発表要旨」九〇十一頁。
- ② 藤森栄一「旧石器の狩人」学生社 昭和四十年十一月、一九四〇三頁。
藤森栄一「日本石器時代研究の諸問題」考古学研究 第9巻第三号。
- ③ 佐藤暁「東九州地方の「旧石器」研究の諸問題」、考古学研究、第10巻第一号。
- ④ 富来隆・佐藤暁・藤内喜六・二宮昭二「丹生台地に於ける旧石器遺跡群の発見概報」昭和三十七年、大分県社会・民族学誌『とよ』三〇頁、および昭和三十七年七月に同会より声明された「丹生台地石器について」のアップピール。
- ⑤ 本間嘉晴・斉藤良二郎・椎名仙卓・黒田一武「佐渡長木遺跡発見の前期旧石器」佐渡博物館々報第10号 昭和三十七年六月。
- ⑥ 副雅幸・大塚昭憲「大分地方の「先縄文」について」大分県地方史第27号 昭和三十七年。
- ⑦ 筆者も、この遺跡は国分直一教授・伊原晃融・伊東昭雄の三氏と共に再三踏査した。
- ⑧ 金関丈夫・国分直一・佐藤暁「西日本における前期旧石器遺跡」日本考古学協会要旨 昭和三十七年。
- ⑨ 国分直一「シナ海諸地域と先史日本文化」民族学研究特集「日本民族文化の起源」第30巻4号 昭和四十年二月。
- ⑩ 小津留洞穴の調査資料は現在下関市の水産大学で国分教授により研究されている。
- ⑪ 大分県文化財調査報告第十二輯「続早水台」八幡一郎「緒言」による。
- ⑫ 国分直一・佐藤暁「K S F I I 地区の調査」大分県文化財調査報告第十二輯「続早水台」大分県教育委員会刊 六六〇九七頁。昭和四〇年三月。
- ⑬ 芹沢長介「大分県早水台における前期旧石器の研究」日本文化研究所研究報告、第I 集 昭和四〇年三月 八八〇八五頁。
- ⑭ 藤森栄一「旧石器の狩人」学生社 昭和四〇年 一九八頁にも同様な指摘があり、現在芹沢氏は早水台の旧石器が日本最古だと主張している。
- ⑮ 松井健・加藤芳朗「中国・四国およびその周辺における赤色土の産状と生成期―西南日本の赤色土の生成にかんする古土壌学的研究」第

②報 資源科学研究所彙報 第六四号 昭和四〇年三月、及び小野忠熙・河野通弘「本州西端の海岸後丘」 第四紀研究 第三卷第五号 昭和三十九年。

⑮ 小野忠熙・河野通弘・前掲書

⑯⑰ 日本考古学協会員三島格氏の教示による熊本県の第四紀系統図表による。

(三) の引用及び参考文献

① 白崎高保「東京稲荷台先史遺跡」 古代文化第一二卷八号 昭和16年。

② 藤森栄一「かもしかみち」 葦牙書房 昭和二十一年 一八〜一九頁。

(四) の引用及び参考文献

① 八幡一郎・賀川光夫「早水台」 大分県文化財調査報告 第三輯 大分県教育委員会刊 昭和三十年 第五章「土器」の項、及び賀川光

夫「Y K I S O 調査区縄文早期の遺跡・遺物(一)土器」 大分県文化財調査報告 第十二輯、「続早水台」大分県教育委員会刊 一〇〜二

二頁

③ 岩尾松美・酒白義明「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」 大分県地方史 第三四号 一三〜二九頁

賀川光夫「川原田洞穴調査概報」 洞窟遺跡調査会々報 第7号 昭和三十八年。

⑧ 現在 筆者が整理研究をおこなっている。

(五) の引用及び参考文献

① 八幡一郎・賀川光夫「早水台」 大分県文化財調査報告 第三輯 大分県教育委員会刊 昭和三十年 第四章「集落址」参照。

② 賀川光夫「押型文土器共伴資料」九州考古学、②号の論考に小畑原遺跡の名及び出土品が記載されているが、实地踏査を行なっていない。小畑原A遺跡と小畑原B及びC遺跡を同一出土点と誤っている。この遺跡は昭和二十二年当時日出高校生であった中谷氏(現在大分県玖珠郡)と佐藤俊三氏(現在小倉市にて歯科医を開業、筆者の実弟)が発見した。

- ③ 大分県下にさきかけて町内の遺跡台帳を作成した。その後大分県教育委員会が昭和三十六年度に遺跡台帳を作成した。「大分県遺跡一覽」昭和三十一年 一八二頁 口出町の項に「小畑原A遺跡・B遺跡」が記載されている。

(六) の引用及び参考文献

- ① もっとも簡単に採集・狩猟民のを知るには、石田英一郎・寺田和夫・石川栄吉「人類学概説」日本評論社 昭和三十三年。杉浦健一「人類学」同文館刊 昭和二十八年などの人類学入門書採集狩猟民の章を見るとよい。また馬淵東一編の「人類の生活」毎日新聞社刊もよい参考になる。いま少し詳細に学びたい人は、中山書店刊の講座現代文化人類学 全4巻 「人間の社会」を参照されたい。
- ② Heine-Geldern, Robert "Südostasien" I Ustrierte Völkunde II, 689—963, strecker und Schröder, Stuttgart, 1939. do. "The Archaeology and Art of Sumatra", Sumatra, Wiener Beiträge zur Kultur-geschichte und Linguistik III, 305—331, 1935.
- ③ Schlette, Feidrich, "Die ältesten Haus und Siedlungsformen auf des steinzeitlichen Fundmaterials Europas und ethnogischen Vergleiches" Ethnographisch und Archäologische Forschungen V, Berlin, 1958. 及び Wisler, Clark, "The Relation of Nature to Man in Aboriginal America, Oxford Univ. Press N. Y. 1926 が参考になった。

(七) の引用及び参考文献

- ① 藤森栄一「原始古代聚落の考古学的研究について」歴史教育 昭和四十一年四月 四〇五頁。
- ② 狩猟民の人口密度・領域・冬の村などについては、馬淵東一「人類の生活」(毎日ライブラリー)毎日新聞社、や Murdock, G. P. "Our Primitive Contemporaries", New York, 1935. (土屋光「世界の原始民族上・下巻 聖紀書房 一九四三年)などがとてもよく参考になる。
- ③ 富来隆「先史社会における水田経営とマコモ」大分県地方史 第二十六号 昭和三十六年

(六) の引用及び参考文献

- ① 岩尾松美・酒匂義明「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」大分県地方史第三四巻 昭和三十九年。
 - ② 賀川光夫「川原田洞穴調査概報」洞穴遺跡調査会々報 8号 一九六三年。
 - ③ 八幡一郎 賀川光夫「早水台」大分県文化財調査報告 第三輯七頁 昭和三〇年。
 - ④ 小野忠熙・河野通弘「本州西端部の海岸後丘」第四紀研究 第三巻五号 昭和三十九年 二七五頁。
 - ⑤ 昭和三十九年 海図の上で筆者が提案し、小野忠熙教授と見解の一致を見て昭和四一年八月、アクアラングにより確認。
 - ⑥ 角田文衛「旧石器・中石器時代」世界史大系、I巻 先史時代 二二三頁。
J. Desmond Clark. "The Prehistory of Southern Africa" A Pellican Book, A 458, 1959.
C. Van Riet lowe. "The Pleistocene Geology and Prehistory of Uganda", Part II: Prehistory: Geological
suevey of Uganda. Memoir No. II, VI, Colchester, England, 1952 などが参考になった。
 - ⑦ 水野浩一、小林行雄「国解考古学辞典」貝塚の項 一三九頁。
- (九) の引用及び参考文献
- ① 考古学に用いられている物理学・化学的技術方法については、M・J・エイトケン（浜田達二訳）「物理学と考古学」みすず書房 昭和四〇年が非常に参考となる。
 - ② 八幡一郎「日本考古学現下の課題」歴史教育 第十一巻三号 参照
 - ③ Emory, K. P. "Polynesia" (Asian Perspectives, I (1,2)) 1957.